

お父さん お母さんの子育て体験記

(社)群馬県私立幼稚園協会 創立55周年
群馬県私立幼稚園PTA連合会 創立40周年 **記念事業**

特選作

		敬称は省略
魔法のことば	前橋市	茂田恵子
故郷	高崎市	舟山明子
支え合う子育て	佐波郡	諏訪裕子

優秀作

神様からの贈り物	藤岡市	稲葉美加
家の顔・外の顔	伊勢崎市	大島和代
子どものころ、おやしらず	高崎市	高柳恵美子

入選作

幼稚園に通わせて	利根郡	鈴木裕美子
小さなごほうび	多野郡	佐藤幸子
頑張ろうね	多野郡	宮崎明栄
幼稚園が好き	高崎市	清水よしの
子育てで大切なものは	藤岡市	黒柳真理子

園名は省略。文章中の個人名は仮名です。

「魔法の言葉」 茂田 恵子

入園時、私の息子は、3月生まれということもあり、周りの子どもと比べると、人一倍小さく幼くみえました。人見知りをする方で、何をするにも遅く、そのせいか公園では友達となかなか上手に馴染めませんでした。バスでの通園が始まると、バスに乗る事を嫌がり先生に抱えられ、泣きながら園まで行くことが何度もありました。幼稚園での生活に母も子も不安でいっぱいでした。

でも不思議です。いつからでしょう？母の手を振り払って、先生の元へ駆け寄るようになったのは？。今までとは違う瞳で、幼稚園で友達と遊んだ事、先生が教えてくれた手遊び、絵、踊りなどを私に、身振り手振り教えてくれるようになったのは？。先生のどんな魔法にかかったのでしょうか？私には不思議でなりませんでした。そしてその秘密は、こんなところにあったようです。

入園して半年のある日、大きな宝物を持って帰ってきたのです。運動会のお遊戯の練習でのことです。音楽に合わせて輪を作る時に、一番背の低い息子が先頭を歩きます。いつもなら先生が手をつなぎ一緒に歩いてくれるのですが、明日が本番です。今日から一人で歩かなければなりません。その時、息子に先生が小さな魔法をかけてくれたのです。「くんがね、ばら組さんを引っ張って行くんだよ。だからしっかり歩いてね。」母親から離れ、家族から離れ、社会という中で初めて、『責任』というものを先生から頂いたのです。その言葉で、今まで決して得ることのできなかつた『自信』が息子の中で芽生えたようでした。当日、今までにない強い眼差しで「僕、がんばるよ！ばら組さんを引っ張るんだよ！」そう言って誰よりも胸を張り、誰よりも誇らしげに、大きく手を振って歩いていました。この時の感動を私は生涯忘れることはないでしょう。

先生の言葉の魔法が息子を包み込んだ日のことを。この先さまざまな子育ての壁にぶつかった時、私にもその魔法が使えますように....。

「故郷」 舟山 明子

夫婦とも、東京で生まれ育ったせい、群馬に越してきて、息子が生まれて、「息子の教育の為には単身赴任をしてでも故郷に帰ったほうが良いのではないか」と思ったことがある。血縁もなく、地縁もなく、近くの幼稚園に息子を入れるまで、不安の毎日だった。

息子は今、幼稚園の年中になる。3年保育のありがたさで、去年出来なかったことも、今年は経験で乗り切っているようだ。たまたま幼稚園にお迎えに行った時、担任の先生に「まあちゃん、すっごくがんばってますよ。」と声をかけていただいたりする。

面白いもので、私や夫が出来なかったようなことをさくさくとクリアしてみたり、また逆もあり、幼稚園に通うようになってからの息子の個性の発揮に目を細めたり、見張ったり、白黒したり、家族三人大忙しである。

この地にたまたま引っ越してきて、右も左もわからなかった夫婦にとって、息子を幼稚園に通わせるということは、とてもいい勉強になっている。大根汁、どんどやき、もちつき、どれをとっても、息子だけでなく、私たち夫婦にとって初めての体験で、地域に密着した行事をしてくださる幼稚園に、夫婦二人して育てていただいている感すらある。

先日、幼稚園バスのバス停が一緒のお母様のお誘いで、近所の小学校の式典に参列させていただいた。生徒たちが「ふるさと」を歌っていたが、私にも夫にもあの歌に出てくる情景の故郷はなく、息子にはその故郷があるという、ねじれを感じて、奇妙な思いとともに、「ああ、ここで子育てが出来て良かった」と思った。

裸足で駆け回る運動会、毎日のおべんとう、都会ではとても味わえない季節の移り変わりを家族三人で満喫し、日々楽しく暮らせるのは、幼稚園のおかげだと思っている。

この地で生まれ、成長していく息子には、この群馬の地が故郷であり、誇りに思っていて欲しいと晴天の日に映える榛名山を見ながら夫婦で祈っている。

「支え合う子育て」 諏訪 裕子

息子の啓介は、年長組の6才。幼稚園が大好きな男の子です。でも、そんな息子も1度だけ幼稚園を嫌がったことがありました。

年少の夏休みの登園日、息子は保育室に入らず「ママ寂しいよ～」と言って私の方に走ってきました。突然のことでびっくりしたのですが、先生におまかせして私は帰宅しました。

その後、息子は幼稚園に行くことを嫌がることなく楽しそうに通園していたので、その時のことはすっかり忘れていました。

しかし年少が修了した3月のある日、園長先生が退職されることを知り息子に話したところ「園長先生にプレゼントする」と言って、絵を描き始めたのです。

太陽の光のもと、園長先生と息子が砂場でお山を作っているその絵は、ひいき目に見ても決して上手いとは言えず、こんな絵をプレゼントに……と思いながらも園長先生にお渡ししました。すると園長先生は「啓介君は覚えていてくれたんですね」と言ってとても喜んで下さったのです。すっかり忘れていたあの夏休みの登園日、園長先生は息子とずっと2人で砂場で遊んで下さっていたのです。そしてお帰りの時間が迫ってきた時、息子は「僕もう大丈夫お部屋に入る」と言って、クラスに戻って行ったそうです。園長先生のお話を聞いて、私は息子が納得いくまで付き合っただけであげたことがあっただろうか、忙しさにかまけしっかりと向き合うことをおろそかにしていなかっただろうか、と反省させられました。しかしそれと同時に子育てって私1人でするものではない、こうやって先生方など周りの人に支えられて子どもは育っていくものなのだと思います。このように支え合う子育てが常にできたら親は心強いし、子どももとても安心感を得られるようです。

今も息子は相変わらず、幼稚園が大好きで毎日楽しそうに通園しています。温かな周りの人々に見守られながら。

「神様からの贈り物」 稲葉 美加

我が家には、小2の娘、年長の息子、年少の娘と三人の子どもがいます。今回は、息子と私の体験をお話したいと思います。息子は思わぬ病気をもって産まれてきました。自力で排便、排ガスができず、お腹はガスで張っていて、母乳も思うように飲めず、少し飲んでも吐いてしまう状態でした。そこで、生後三日目に私の手元を離れ、小児医療センターに入院し検査をすることになりました。この時の私は出産後間もなく、自分で病院に会いに行くこともできず、母乳を凍らせ主人に届けてもらっていました。検査の結果、手術を受けることになり、生後三ヶ月の時に手術を受けました。術後、小さな身体に色々な管を入れた息子をみた時は胸が苦しくなり、涙がこぼれました。手術は成功しましたが、肛門をいじったので、浣腸で排便のコントロールをしていく必要がありました。息子は小さな体を震わせ、お腹の痛みを耐え頑張りました。

三歳になり、幼稚園への入園を考えた時、随分悩みました。そして、上の娘の通っていた幼稚園の先生に息子の身体のこと、排便のこと（オムツがないと便意がよくわからないこと）などを相談したのです。すると先生から「替えのオムツを持たせてくれれば大丈夫ですよ。」と言って頂き、入園させることを決めました。オムツが必要なくなるのはいつになることかと思っていましたが、友達の行動に刺激され、思っていたよりも早くオムツがとれました。そんな息子も今は年長さん。浣腸と通院は続いています。他の子ども達とかわりなく、元気に毎日を過ごしています。入院中助産婦さんに、「病気や障害を持っている子を授かった親は、不幸じゃなくて神様に選ばれたんだよ。大きくなったら、人に優しくできるいい子になるよ。」と言われたことを覚えています。とても貴重な体験をさせてくれた神様からの贈り物、これからも大切に育てていきたいと思っています。

「家の顔・外の顔」 大島 和代

良い子にしててね。

我々大人は、普段何げなくそう言う。しかし、『良い子』の基準とは如何なるものか。理想を高く掲げると親子共々疲れてしまうので、とりあえず、家庭の内と外で態度を変えないか否か、という点には留意して、我が家では子育てをしている。そう云った意味では、私立幼稚園は行事が豊富で、子どもの外の顔を観る機会に恵まれているのはありがたい。

長女の時には親の方に余裕が無く、ゆっくり観察する事が叶わなかったものの、現在年中組に在籍している次女は、それを取り返すように、余裕を持って眺めることが出来る。

家庭に於いて、次女は最も幼い。それ故、同居している主人の両親を含めた家族全員が、つつい甘やかしてしまう存在である。しっかり者の長女とは対照的な甘えん坊で、これで本当に幼稚園での生活を無事に送っているのだろうか、と誰もが心配する子なのだ。

だが、園で垣間見た彼女の表情は、良い意味で家庭の内とは異なっていた。行事毎に見せる成長はもちろんのこと、何げない仕草に驚かされた事がある。

例えば、保育参観があった日のこと。帰り際、母親の姿を見失って泣いている男の子がいた。すると親が教えた訳でもないのに次女が彼に近づいて、自分のハンカチを出して涙を拭いていたのだ。家では泣き虫で甘えん坊の次女も、集団生活の中ではきちんと成長し、優しい気持ちが芽生えているのだと、見せつけられた思いがした。

子供たちは、たとえて言うならば、危なっかしい空中ブランコ乗りのようなもの。それを支えるために、我々親達は保護ネットの如くに手を伸ばして構えている。けれどもそんな心配をよそに、想っている以上に、自由に、巧みに、子供たちは宙を舞うのだろう。これからも大きく舞い続けて欲しい。我々の手はそれを守るためにあるのだから。

『子供のころ、おやしらず。』 高柳 美恵子

この春、上の息子が年少で幼稚園に入園した。楽しそうに園バスにのり、ニコニコがおで『ただいま』を聞けるのを本当に嬉しく思っている。

三十代半ばでの出産、育児環境を整えるのに仕事を辞めた。2歳違いで娘にも恵まれた。しかし『2人目は楽』は当てはまらず、精神的にどんどん落ち込んでいくのがわかった。当然思いたすのはバリバリと仕事をこなしていた日々。それに比べ今はどうか、何故仕事を辞めてしまったのか、いつまでこの生活が続くのか、意識は常に自分に向いていた。反面、表はよい母親に見えるように気をくばり、現実との差にストレスを感じていた。躰は『子育てNGワード』連発、自分が嫌だったおこられ方を再現する毎日。そして、自己嫌悪で眠れない夜。

ある日、些細なことで感情が爆発した。『**かあ**やあ～めた。ばいばいね』といい、家から出ていこうとしたのだ。3才の息子が追いかけてきて『いい子になるから、いっちゃんやだよ。かあにごめんなさいするんだよ』と涙でぐちゃぐちゃな顔で1才の妹に言っていた。それをみて私は泣いた。息子と娘と3人で団子になって大声で泣き続けたのだ。すると息子が『**かあ**泣かないで。僕がいるからね』といって頭をなでてくれたのだ。娘はちいさな手でしがみつき『めん、めん(ごめん)』と言っていた。自分ばかりを大事にしていた私。そんな私を好きでいてくれた子供達。『こんなだめなかあでもいいの？すきだとおもってくれるんだね』

この出来事の後、実はあまり普段の生活は変わっていない。相変わらずだめな**かあ**である。でもなんとなく晴れやかな気持ちなのだ。多分子供達が少しだけ自信をくれたからかも知れない。

2年後、娘が年少で入園し兄妹でバスにのる頃には、少しはよい母親になれるだろうか。いや、簡単には変れないだろう。でも少しずつでも努力したい。彼らの気持ちに答えられるように。

「幼稚園に通わせて」 鈴木 裕美子

毎朝「お腹が痛い。」と泣いてバス登園を嫌がっていたさなか、突然、母親の私が入院する事になってしまいました。病室で「今日も泣いて行ったのかな？」と毎日思っていました。いつもと全然違う生活。夜はパパとパパの実家に泊まり、朝と帰りのバスは、私の実家から。登園の乗車の時、「涙がでそうになるから見ていないで。」とおばあちゃんに言ったそうです。半ベそで幼稚園に着いた時には、先生方が外に出てくれて「がんばれ！けんちゃん！！。」と励ましてくれた事、「今日は、けんちゃん泣かなかったですよ！」とパパの携帯電話にまで連絡をくれた担任の先生。私の入院中は何も言わなかったのに、退院の日がわかったら、お迎えのお母さん達に、「今日ママ退院するんだよ。」と初めて言った事。大好きな先生に、「ママ、運動会には来れるんだよ。」とこっそり教えた事。みんなみんな後になって知りました。退院の翌日が運動会でしたが、慣れない生活の日々の中、一生懸命練習をし、当日ががんばっている子供の姿を見ながら、本当に親は子供の為にも元気で毎日を過ごさなければならないと痛感しました。今、先生方や本人の努力で、朝のバスは泣かなくなりました。見送る私に、手を振る時さえあるようになりました。ひとまわりもふたまわりも子供が大きくなったなと感じています。帰りはお迎えです。「ママーッ！！」と私を見つけて飛びついてくる一瞬一瞬を大事に、大切にあと一年と半分しかない幼稚園生活を親子で、楽しく過ごしていきたいなと思っています。

「小さなごほうび」 佐藤 幸子

息子が幼稚園に入園したのは2年前の春です。ちょうど4歳の誕生日を迎えてすぐでした。入園した頃はとにかく落ち着きがなく、先生に迷惑ばかりかけていた様な気がします。

そんな息子の初めての運動会が無事終わり、帰ろうとしていた時のことです。「有斗くんのお母さん！」と担任の先生に呼び止められました。私は一瞬、息子が何かしでかしたかと思いきとしました。しかし先生は笑顔で「さっき一人一人メダルを渡したときに有斗くんが、先生もお仕事いっぱいがんばったからこれあげるねって小さな紙に包まったチョコをくれたんです。もう、すごくうれしくて・・・。」と言いました。そして、すぐ近くにいた息子に優しい笑顔で「先生うれしかったよ。ありがとう。」と言って抱きしめてくれたのです。そのときの息子の照れた笑顔を今でも思い出します。

家に帰り、疲れて眠ってしまった息子のそばで、その日撮ったばかりの運動会のビデオを主人と一緒に見ました。先生にメダルをもらった後、先生の手ひらに小さなごほうびを渡しているまさにそのシーンを見たときに、思わず目から涙があふれ出しました。いつの間にポケットに忍ばせていたのかは知りませんが、先生を思いやる気持ちを持つまでになった息子の心の成長に、ただただ嬉しくて泣きました。

それから1年後、折り紙で作ったメダルに形を変えた小さなごほうびは、その年新任だった担任の先生にもとても喜んでもらえました。

そして今年、幼稚園最後の運動会、2年前と同じ担任の先生に、そのごほうびは贈られました。

園での生活の中で、先生方からのたくさんの言葉がけをいただけたことが何より心の成長につながったのだと、今、心から感謝しております。

「頑張ろうね」 宮崎 明栄

『幼稚園で過ごしている時間は 今までしなくてすんでいた我慢をいっぱい、いっぱいしているんだからおうちに帰ったらたっぷり甘えさせてあげてね』

これは入園当初 先生から言われた意外なひと言だった。人見知りもしない元気な息子が急に甘えることが増えた頃の言葉。

母子家庭で一人っ子という環境の中で知らず知らずのうちに甘やかしてはいけないような気がして私の中に張りつめたものがあった。そのせいかたった三、四年しか生きていない息子にたくさんの要求をしていた気がする。そうは言っても幼稚園での生活で、今まで以上にいろんなことができるようになってくると、たくさん褒めてあげたいと思いつつも、ひと言余分についてしまうことが増えた。

息子は日頃ひょうきんな面が目立つのに、実は運動会や発表会などの本番で緊張しやすいタイプだと気づき『たった何分かのことだよ。失敗してもいいんだから。見てるのはママ達なんだもん、しっかりね。』と何度も言った気がする。その私の言葉の力のなさを実感したのは去年のクリスマス発表会でのこと。去年から子供たちの発表に加えて保護者も何か発表することになった。

たった何分かのこと……。失敗してもいいんだから……。見ているのは自分の子供達……。そのはずなのに舞台に立つとホールが大きくなってしまったように感じた。

子供の世界で、同じ立場で、同じことを体験する。そんな貴重な体験ができてこんな中で息子は発表していたのかと思うと無条件にすごいと思ってしまった。母子家庭で一人っ子だから私には息子一人だけを見つめたり近づいたり遠くで見守ったりする余裕がある。

『頑張れ』が『頑張ろうね』に変わった今。そんな中で素敵な時間を重ねていきたい。

「幼稚園が好き」 清水 よしの

「うちより、公園より幼稚園が好き」ある日の休日、子どもが突然つぶやきました。母親としては、家より良いなんてそれはないでしょうと思いましたが、それ程幼稚園が楽しいのだなと安心しました。

現在、年中組ですが一度も幼稚園に行くのを嫌がった事はありません。朝送って行くと幼稚園の門が見えるやいなや教室まで猛ダッシュ。家に帰ってから「何で走って行っちゃうの？」と尋ねると「だって先生に早くあいさつしたいんだもん」とのこと。

実は長男が入園する10ヶ月前に弟が産まれましたが、弟に対する焼きもちがひどく悩んでいました。もう限界だと思い少し早く入園させようかと主人に相談した程です。しかし、幼稚園へ通ってからの子どもの成長には、本当に驚かされます。ある日、家のスリッパを子どもが揃えていました。エライねとほめると「だって先生が言ってたよ」と。またある日、教えた覚えのない事を子どもがしており、ほめると「先生がこうにした方が良くって言ってた」とのこと。親の言う事より何より、うちの子どもには先生の言った事が一番のようです。

私が子どもの事で先生に相談すると、子どもの成長に合わせて客観的にアドバイスして下さるのでとても参考になります。親はそうはいきません。「片付けなさい。食べなさい・・・」等々つい声を荒げてしまいます。先生はいつも諭すような口調で子どもに語りかけています。そして子どもは言う事を聞いています。さすが保育のプロと思わずにはいられませんでした。私に足りないのはこれなのだなど、いつも反省させられます。

年少組の最後に、全て手作り、手書きの子どもの写真集が届きました。先生からの添え書きを読んであげるとうれしそうに笑い、「これかずちゃんの宝物」とニコニコしていました。

「子育てで大切なものは」 黒柳 真理子

我が家には、三人の子どもがおります。中学一年の長女、小学三年の長男、幼稚園に通う年長の次男です。

幼稚園にお世話になる前の子育てと云ったら、手探り状態で、なかなか自分の思うように子育てができず悩み、息詰まったものでしたが、幼稚園に通い始めてから少しずつ、園生活を通して子育ての「ツボ」が、わかってきました。子どもを褒めながらも、しつける部分は、しっかりと押さえ、子どもが花を見て「きれいなお花だね。」と言ったときに「そうだね、きれいだね。」と、共感できる心を母親が、持てるようになると自然と親子関係が深まっていくという事。大切な時期を幼稚園の先生方は、一緒に子どもの為に適した方法を考え、相談にのって下さいます。

そして、私に心のゆとりができはじめた時、子どもの絵を見て、嬉しいな、元気が出てくるなと感じられるようになったのは、二番目の子が、入園する頃でした。

三番目の子には、今までの子育ての経験を生かして、肩の力を抜いて子どもと向きあうことができるようになりました。朝、幼稚園まで手をつないで、歩きながら、うたをうたったり、空を見上げて「お日様が、元気だね。」足を止めて、色づいた木々を眺め「わぁ～きれい。」あじさいの花を見て「花の中に花があるんだよ、お母さん、知ってる？」と、自信满满にお話ししたり、大好きな虫を見つけると腰をおろして、しばらく観察しながらの楽しい登園は、忙しい日々の中で唯一ゆったりとした時間を持つ時です。

子育ては、まだまだ始まったばかりですが、小、中学校へ通う二人の子どもを見ていると自信を持って物事に取り組む姿勢が、あるのも幼児教育が、根底にしっかりありその上に学校教育が、積み重なってきているからだと思います。最初から完璧な子育てを目指さないで、子どもと共に成長していく気持ちでいると、楽しい子育てになると思います。